

闇の同居者

2009.06.26

ここに、いるんだよ！

地下室から、ドンドンと 扉を叩く音が 聞こえてきました。

ああ。
まだ、いたのね？

わたしは、ため息を つきます。

ずっと前から ここにいる その存在は、
かなりの年月の間
この家を自由に 歩き回っていたようでした。

あるときは、インテリアとして。
あるときは、日用品として。

そこにあるのが あまりに自然で、
すっかり風景に 馴染んでいたものだから。

わたしが、その存在の存在に気づいたのは、
わりと最近のことでした。

ああ。
この家には、このようなものが 存在していたのね？

彼を見つけ、その存在を カタチとして認識し、名前をつけたとき、
家中が、ざわざわと しました。

そんなやつは、この家には、要らない！
そんなやつは、追い出してしまえ！

だけど、彼は 出て行きませんでした。

いえ。
出て行こうとは、したのです。

悲しげな笑みを浮かべて、肩をすぼめ、
自分のために開かれた扉に手をかけて
この家から 出て行こうとしました。

が、彼の 居るべき場所は、ここしかありません。

一度は 外の世界へ 足を踏み出したけれど、
ぐるりと向きを変えるや否や、
彼は ダーッと 走り出し、地下室へと 逃げ込みました。

誰も、彼を止めることは できませんでした。

いまや、この家の誰もが、
彼が 地下室にいることを、知っていました。

誰もが、彼の存在を認め、
そこにいる権利をも、認めていました。

そうするより しかたがなかったのです。

彼の居場所は この家の中にある、
ということは、最初から、誰もが わかっていたのですから。

彼は、それから、ときどき 姿を あらわしました。

が、その存在を 個別に認識されてしまった以上、
以前のように、なにかに紛れて ふらふらと 家の中を歩き回ることは
できなくなったようです。

彼は、ふだんは 地下室で おとなしくしていました。

眠っているのかもしれませんが。
耳を澄まして、上階の様子を 伺っているのかもしれませんが。

彼が その気にならない限り、
地下室からは、コトリとも 音は 聴こえてきませんでした。

そんな彼が 地下室に 閉じこもっている間は、
わたしは、彼がこの家にいる、ということを、すっかり 忘れていました。

わたしたちは この家で、やるべきことが たくさん あるのです。
彼が、以前は 日常的に この家で 忙しくしていたのと 同様に。

それでも、彼は、いなくなったわけでは ありませんでした。

この家の誰もが 彼の存在を忘れかけた頃、
ドンドンドン！と、扉を叩く音が 聞こえるのです。

ここに、いるんだよ！

この音を耳にして 初めて、わたしたちは、彼の存在を 思い出し、
少なからず 憂鬱な気分になるのです。

今朝も、彼は 久しぶりに 地下室から 上がってきました。

わたしは、軽いため息をつきながらも、それを隠して 笑顔をつくり、
寝癖のついた彼のアタマを そっと 撫でました。

彼は、モノを言いたげな表情で わたしを 見つめましたが、
まだ そのときではない、と、判断したのでしょう。

黙っていました。

もしかしたら、本当に 単純に、
「僕は、ここに、いるんだよ！」ということを示したかっただけ、
なのかもしれません。

彼は、無言のまま リビングのソファに座り、
しばらく そこで じっと 宙を見つめていました。

わたしも、紅茶を飲みながら、彼の向かい側に座りました。

話しかけるわけでもなく、視線を合わせるわけでもなく、
ただ、一緒に 座っている。

今日は、それだけで十分な気がしました。

それでも、多少の落ち着きのなさを感じていたのは、事実です。

彼は いつでも 突然、
こちらの準備など お構いなしに、姿を見せるんですもの。

そして、わたしの そんな居心地の悪さも また
彼の黒い瞳には お見通しであることも、
わたしには わかっていました。

空っぽな時間の中、
わたしが 午後の仕事の予定について 考え始めた頃。

彼は 口元に 微かな笑みを浮かべ、立ち上がりました。

また、来るのね？

わたしは、声に出さず、目で 彼に 問いかけました。

ああ、また来るさ。
たぶん・・・ね。

彼の左肩の丸みが、
静かに、しかし しっかりと、答えました。

彼は きっと、
一生、この家に 棲み続けるのでしょう。

わたしたちが 忘れた頃、また 地下室から 上がってくるのでしょう。

もしも、彼が この家を出ていくのならば。

わたしたちの見送りを受けることもなく、
こっそりと いつのまにか、姿を消すのでしょう。

彼がいなくなって 何年も経った後、
ようやく わたしたちは 彼の不在を知ることになるのでしょう。

そういえば、あいつ、最近 姿を見せないね？
とうとう 出て行ったのかな。

いつ いなくなったんだろう？

さあね。
いつのまにか……だね。

彼は ひとつ 大きく伸びをすると、
地下室への階段を ゆっくりと 降りていきました。

その見慣れた後姿は、ゆらゆらと揺れる暗闇に
ゆっくりと 飲み込まれていきました。

その様子を、家中が、息をひそめて 見守っていました。